

純愛の繭

たておきちはる

「回してみる？」

制服のブラウスをたくし上げる彼女の鳩尾には、見慣れたハンドルがあった。ガチャッと回して、ポンと出てくる、カプセルトイマシンのそれだ。

「回してみたい？」

突然のことに理解が追いつかない。イエスでもノーでも、正解ではない気がした。目を白黒させている僕の表情に満足したのか、彼女はふわりとほほ笑んだ。

「■■■■くんなら、いいよ。回しても」

唾を飲み下すだけで精一杯で、僕は言葉を発することができない。

朝練に勤しむ野球部員が打ち上げた白球が、教室に金属音を響かせた。

「でも、まだだめ。足りないの」

彼女によると、何かしらのゲージがたまると、月に一度程回せる状態になるらしい。他にも多少説明してくれたような気もするが、続いた言葉が全てを上書きしていった。

「ねえ。君は、どのわたしが欲しいのかな」

再び彼女から呼び出されたのは、それからおよそ半月後のことだった。

「回して、■■■■くん」

学校からの帰り道。河原の橋の下で、彼女は待っていた。

僕の顔を見るなり、抱き着くような勢いで距離を詰め、あの時のように鳩尾のハンドルを露わにする。

「あのね、時計回り。逆に回したらダメだよ、壊れちゃう」

気味の悪い無邪気さ。その勢いに押され、言われるがままにハンドルに手をかける。

「何が出てきたら、うれしい？」

うっとりと言われても、僕の頭はもうほとんど動いていない。

恐る恐る右に捻る。ガチャ…と、まさにその音がした。

「ねえ、もっと回さなきゃ。最後まで」

呪文のようなその声に、僕の右手は従うしかない。

「ガチャガチャ…」

ハンドルを回す感触に微かな変化を感じて、背筋が粟立つ。

得体の知れない恐怖に指先から体が侵されていく。

早く、早く終われ。

いよいよ耐えられなくなった僕は、意を決してハンドルを回し切った。
「ガチャン！」

彼女の唇から、ひゅう、と小さく息が漏れた。

喉奥がゴポリと鳴り、その口元から一瞬、舌が覗いたように見えた。

とたんに彼女の体が弓なりに反りかえる。

慌ててハンドルから手を離れた次の瞬間。

透明な唾液の糸を、西日に光らせて。

口からボンとカプセルを吐き出した。

一部始終がスローモーションのように、頭の中を何度も駆け巡る。が、到底消化できるものではない。しかし彼女は、難なくそれを自らの手で受け止めると、スカートのポケットから取り出したピンク色のハンカチで綺麗に拭いた。彼女にとってこれは珍しいことでは無いようで、その動作はごく自然で、とても普通だった。

「あげる」

まるで飴玉でもくれるような気軽さで、彼女はカプセルをこちらに差し出す。

半分は透明で、もう半分は赤い。幼い頃から幾度となく目にしてきたカプセルだ。

その透明のほうから、得体の知れない何かが透けて見えるような気がして、直視できない。いつまでも受け取ろうとしない僕の気持ちを察してか、彼女は僕の手を取る。

そして満足げに微笑みながら、カプセルを手の平にコロンと乗せた。

重さはほとんどない。

人肌の温もりだけが、自分は確かに先ほどまで彼女の中にあっただと訴えかけてくる。

一方で、一瞬感じた彼女の指先のゾツとするような冷たさが拭えない。

「当たり前が出るといいね」

川のせせらぎがノイズに変わる。カプセルがドクンと脈打ったような気がした。

迫る夕闇さえ、自分を狙っているかのような気分だった。

絶対に、誰にも知られてはならない。悟られてはいけない。全身が全力で警告している。縛れる足で転がるように家に帰った僕は、自室に滑り込むと即座に鍵をかけた。

恐る恐るブレザーのポケットから取り出したカプセルを、ベッドのシーツの上に置く。

呼吸が荒い。体中に汗が滲む。胸が悶えるような気がして、自身もベッドに座り込んだ。とてつもなく重大で、危険で、いけないことをしてしまったのではないか。いや、

僕は何もやっていない。本当なんです。犯罪者の言い訳のような言葉。ああ、この台詞が頭に浮かんでいる時点でアウトだ。もう、僕は共犯者なのだ。彼女の。遅効性の毒のように、思考が奪われていく。頭を抱えて痛いほど掻きむしってみたが、テレビドラマのように場面

は変わってくれなくて、自分の幼稚さがただ際立っただけ。数秒ごとに、得体の知れない現実味が足先から増してくる。その不快感から逃れたい一心で考える。どうしてこんなことになってしまったのか。半月前のあの日まで、僕と彼女の間には何も無かったはずなのに。ふと、一抹の違和感を覚えた。

何も、無かった？…少なくとも同じ学校の生徒であることは確かだ。だとしても、どこで出会った？彼女のクラスは？学年は？名前は？どうしてあの朝、二人で教室に居た？

何一つ思い出せない。いや、違う。そもそも記憶は、事実はその存在するののか？

激しく脈打つ心臓が痛い。酸素が足りない。気が遠くなる。吐きたい。吐き出したい。

彼女は、いったい、誰だ？

そう思った時には、既にカプセルを掴んでいた。

開けるな。だめだ。いや、開けたい。知りたい。どうしようもなく開けたくてたまらない。

ーガチャガチャ…

頭の中に、あの音が響く。

震える手で押し開けたカプセルには、

『絵梨 クラスメイトC』

…とだけ走り書きの文字が並んだ、細長くて小さな付箋のような紙が入っていた。

ーガチャガチャ…ガチャン。

全てが壊れる音がした。

気持ちのいい朝だった。

英語の課題は完璧。数学の小テストだって、今の範囲は得意なので心配ない。そして何より、今日は金曜日。明日の休みは、いつもつるんでいるメンバー数名で公開されたばかりの映画を観に行く予定だ。配信を待つか正直迷ったが、もともと原作のマンガが好きだったし、ネットの口コミはわりと評判が良かったので期待度も高い。久々の映画館も楽しみだ。

柄にもなく、深呼吸してみる。少しひんやりとした空気が、心地よく体に満ちていく。明け方に降った雨で、風は微かに緑の匂いを纏っていた。

公園の角を曲がると、同じ学校の制服を着た女子数名が向こうから歩いてくる。

そのうちの一人と目が合った。

「あ、倉田。おはよ」

「おはよ」

クラスメイトである手前、声をかけないわけにもいかず、社交辞令で挨拶を交わす。なんだか少しこそばゆい。倉田は当たり障りのない笑みで応えると、そのまま友人たちとの会話に戻っていった。それだけで、妙な達成感があるから不思議だ。

足早に女子たちを追い越しながら、倉田のことを考える。お互い様だが、特段目立つ生徒ではない。が、笑うとかわいい気もする。部活は何だっけ。…まあ、そんなレベルの仲だ。代り映えしない通学路。何てことのない日常。女の子に挨拶して、少し得意げになって。青春ってやつですかね。たぶん、これが。買ったばかりの白いスニーカーを、朝日に反射させながら。雲一つ無い青空を映す水たまりを、僕はポンと飛び越えた。

うそ。挨拶してくれた、おはよって。うれしい。
水たまりなんか飛び越えちゃってさ、かわいいかよ。
昨日の君が嘘みたいだね。
興奮してるのか絶望してるのか自分でも分かんないみたいな、あの顔。
何回見ても、滾る。たまらない。
いつか皆にも見せつけてやりたい。
でも今は、私だけが知ってる君の秘密。それでいい。
でも。でも。でも。

またはずれ。

あーあ。今回はいけると思ったのに。
君はやっぱり、私を『彼女』にしてくれないのかな。
「絵梨ー、早くー！」
いつの間にか少し先を歩いていた友人たちが、今度の私の名前を呼んでいる。
ねえ、君の『彼女』になれるのは、なんていう名前で、どんな子なの？
神様。私の体のなかに、それはありますか？
お腹の奥の奥の、奥底の、絶対に誰にも見られちゃいけない部分で、ほの暗く考えながら。
「ごめん、待ってー」
全部抱えて、走りだす。君への思いも。私の秘密も。
全部、ぜーんぶ。この体に詰め込んで、溜め込んで。

大丈夫。次は、次こそは。絶対にうまくやるから。